

明石工業高等専門学校図書館

図書館報

第47号 平成24年2月

目次

『物理法則はいかにして発見されたか』	(1)
自著紹介	(4)
私と読書	(4)
私と読書	(5)
読書感想文コンクール	(6)
推薦図書	(12)
利用統計	(13)
利用案内	(14)

「物理法則はいかにして発見されたか」 ファインマン著

京 兼 純

自然科学系で若い読者を意識した啓発書は、これまで数多く出版されており、なかでも本書はノーベル物理学賞を受賞し、その行動がとてもユニークで有名な Richard Feynman (ファインマン) 先生が講演したものを著したものであり、読み物としても大変面白いものとなっています。講演は1964年(昭和39年)に行った「The Character of Physical Law」と1965年(昭和40年)にノーベル賞を受賞したときになされた「The Development of the Space-Time View of Quantum Electrodynamics」です。前者はコーネル大学で一般のかたや学生を対象としたもので、表題からもわかるとおり江沢 洋先生(学習院大学名誉教授)による名訳で、平易な文章となっており、生き生きとしたファインマン先生の語り口がみえてきます。因みに昭和40年度のノーベル物理学賞は、「量子電気力学」の発展に寄与したもので、ファインマン先生のほかに東京教育大学教授の朝永振一郎先生(現在は筑波大学)とMITのシュヴィンガー教授とともに授与されています。

本書の内容は第一部で、「重力の法則 一物理法則の一例として一」、「数学の物理学に対する関係」、「保存という名の大法則」、「物理法則の持つ対称性」、「過去と未来の区別」、「確率と不確定性 一量子力学の自然観一」、「新しい法則を求めて」となっており、第二部はノーベル賞受賞講演とあって、「量子電磁力学に対する時空全局的観点の発展」で数式もあり難解な箇所もでてきますが、それらを飛ばして読んでも物の理(神髄)はわかります。初版は昭和34年(1968年)にダイヤモンド社から刊行されました。その後、岩波現代文庫〔学術〕として平成11年(2001年)に訳者が少し手を加えて再出版され、手に届きやすい本となっています。それも10年前となりましたが、全く色あせずにいつ読んでも新鮮な驚きがあります。

しかしながら、第一部の「新しい法則を求めて」では、例えば次のようなことを語っています。『……略、科学をストップさせてやろうと思えば、法則の良く分か

っている領域のなかだけで実験したらよい。ところが、実験屋とたちときたら、勤勉に、それこそ努力のかぎりをつくして、私どもの理論のまちがい証明できそうなところを捜しては実験するのです。つまり、私たち物理学者は自分のまちがいを一日も早く証明しようとして努力していることになる。進歩をするにはそれしか方法がないからです。今日では、普通の低エネルギー現象には難題の出てきそうな場所はみつかりません。すべてうまくいっているようです。だから、核反応でも超伝導でも難題捜しの特別に大きな計画はなくなりました。断っておきますが、この講演で私が問題にしているのは基礎法則の発見ということです。・・・略』と語っています。が、みなさんもよく知っているように、低エネルギー状態にあっても昭和 61 年（1986 年）に発見されたセラミック系の高温超伝導体は、現在では液体窒素温度（77K）以上で超伝導を示し、金属系の電子（クーパー対）と音子（格子振動の量子化）による相互作用では説明がつかないこともあり、これらをふくめて、新しく発見されているいくつかの現象を頭に入れながら読み進むと、また面白いかもしれません。



ここで少し講演集からはなれ、ファインマン先生等が書かれた講義集（ファインマン物理学：第Ⅲ巻・電磁気学、第Ⅳ巻・電磁波と物性；岩波書店）のなかから、私たちの身近で生じている自然現象について、二つほど紹介したいと思います。

一つは雷です。雷放電については古今東西数多くの絵画や書物がありますが、絵画では俵屋宗達の描いた「雷神風神図」が傑出しており、またフランクリンは凧を揚げて雷の正体が「電気」であることを証明しました。ファインマン先生は雷放電について、まず、地球はなぜ「負：マイナス」に帯電しているのか？なぜ、それが常に保たれているのか？から始まり、雷放電のメカニズムと地球の帯電をむすびつけています。一般に平坦な地表の電位は、1m上昇するにつれて 100V となり、上空 50Km のところに高い電気伝導性をもつ正イオン層が形成されており、電位が約 400,000V となっています。そこから地表に向かって電流密度にして、おおよそ 10^{-12} A/cm² の正イオンが流入してきます。私たちのなじみのある電離層は 60~500Km のところにあり、正イオンと電子がまじったプラズマ状態を形成し、ここでいう正イオン層とは異なるものです。電離層に関しては後の話題のときにまた出てきます。正イオン層から降りそそぐ量は全地球表面で 1,800A であり、約 30 分でプラス電荷によって地球はチャージアップ（±0）されてしまいます。みなさんは気が付いたと思いますが、地球を負に帯電する起源が「雷雲と稲妻」であることが……。単純化された雷雲は地表近くがマイナスに帯電し、雲の上空がプラス電荷をもった巨大な双極子となっています。晴天時に地表がプラスにチャージされ、発達した雷雲のマイナス電荷との間で放電が生じ、負の電荷が地球上に送り込まれます。私たちが目と耳にする稲妻は、地表から雷雲にむかって正電荷が駆け上がるときに起こります。雷放電が地球をマイナスにしている証拠として、ファインマン先生は海洋上での電位を測定し、地球上で活動が最大となっている雷放電数と電位の関係を調べました。するとグリニッジ時間の 19 時に地表電位が 125V まで上昇し、このとき全世界で雷放電が最も活発となっていることがわかりました。そこで先生は雷放電現象を「電池」にたとえて、この電池が上空には正電荷を、地球上には負電荷を絶えず供給している「源」としてしています。雷放電は複雑な現象ですが、地球規模から見れば十分説得力があると思いますが、みなさんはどう捉えるのでしょうか。

もう一つは「鏡」です。鏡といっても太古から使用され、わが国では権力の象徴でもあり、「三種の神器」となっている銅鏡です。で、なぜ銅のような金属をよく磨くと「光」を反射するようになるのでしょうか？雷放電のときにでてきました電離層は、よく知られて

いるように短波（波長が数 10m のラジオ波）を反射し、地球の裏側にある国々のニュースや音楽を聞くことができます。電離層でラジオ波を反射するのと、金属で光を反射するのは原理的には同じとなっています。プラズマ状態となっている電離層では、たえず正・負の電荷が引き合い振動（プラズマ振動）をしており、振動に伴う特定の周波数を持っています。この周波数 ω_p とラジオ波の周波数 ω_r との間で、 $\omega_r < \omega_p$ となったときに屈折率が虚数となり減衰（反射）が起こります。数学的な証明は省きますが興味のある方は、ぜひ本書を一読してください。では、金属と電離層では何が異なるのでしょうか？ 金属も、たとえば銅の場合は、正の銅イオンのまわりを自由な電子が動き回っている状態で構成されており、一種のプラズマ状態になっています。銅におけるプラズマ振動数と電離層のそれを比較すると、電離層では 12 桁ほど小さくなっています。振動数の相違は、電子密度（数）の大きさからきており、銅では 8.5×10^{28} 個/m³、電離層は最も多いところで約 8.5×10^{12} 個/m³ であり、これがほぼ振動数に反映し、入射波の反射が光かラジオ波の違いを生み出しています。つまり、金属のように電子数が非常に多ければ光の領域を、電離層では数が極めて少ないので、波長の長い短波や中波が反射されます。これは余談ですが、多くの情報量を処理するためには周波数をより短くして通信等をする必要があります。当然これらの電波は電離層を通り抜けますので、宇宙に人工衛星を上げ電離層の役割を果たしています。

最後になりましたが教室での先生方の講義は時間が制約され、基本的かつ重要なところを簡潔にのべますので、もし理解が不十分でしたら図書館を大いに利用して、こうしたファイマン先生のような副読本や啓発書をしっかり読んで、学習の一助にしてください。みなさんの自学自習の成果を期待しています。

（きょうかね じゅん 校長）



「物理法則はいかにして発見されたか」
岩波書店，2001.3 ISBN: 4-00-600048-0
請求記号：420.4.E 登録番号：102580
新刊書棚に配架

自 著 紹 介



境田 彰芳

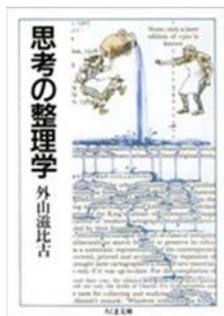
材料強度学（機械系教科書シリーズ 26）
コロナ社， 2011.5
ISBN： 978-4-339-04476-8
請求記号：531.1.S 登録番号：102581

材料強度学（strength and fracture of materials）は材料力学（strength of materials）と同様，機械・構造物に外力が加わった際に生じる変形や破壊を扱う学問であり，金属材料学，材料力学，破壊力学，信頼性工学などの幅広い分野に関連した学際的な領域を対象としている．本書では，金属材料を対象とし，静的強度，疲労，クリープなどを取り上げ，材料強度に関する基礎的事項や考え方を説明するとともに，材料強度学を学ぶ上で必要となる破壊力学や信頼性工学などの基本的な考え方や取扱い手法をわかりやすく説明したものである．なお，本書はコロナ社・機械系教科書シリーズの26番目の教科書であり，このシリーズの教科書としては異例であるが，上記各分野を専門としている5名の共著として執筆した．

（さかいだ あきよし 機械工学科）

BOOK *BOOK* *BOOK*

私 と 読 書



田中 誠一

『思考の整理学』外山滋比古著
筑摩書房，1986.4（ちくま文庫；[と-1-1]）
ISBN：4-480-02047-0
請求記号：141.5.T 登録番号：102550

前職の教授から「君のやってることは寝てるのと同じだね」と指摘されることがよくあった。「下手の考え休むに似たり」と。そんな折に私が教授に薦められたのが本書との出会いである。技術者や研究者は専門知識を用いて新しい技術や知見を生み出すものであり、時間の大部分を考えることに費やすものである。これらの職種を志す者が専門知識を得ようとする場合、学校に行き、先生に教を請う。著者は冒頭において、一見当然と思われるこの行為に対して警鐘を鳴らしている。グライダーは滑空はすれども自力で上昇は出来ない。必要なのは飛行機のように自ら飛ぶ能力を持った者である。この独特な例えは確かに技術者や研究者に必要な能力を表している。本書には飛行機能力に必要な学習やアイデアを生む手法が著者の経験と共に多数紹介されている。これらの手法を実践してみるのも楽しい。自らの考える力を考えさせられる一冊である。

（たなか せいいち 機械工学科）

私 と 読 書



新井 イスマイル

『イノベーションのジレンマ：技術革新が巨大企業を滅ぼすとき』増補改訂版
クレイトン・クリステンセン著
翔泳社，2001.7 ISBN 978-4798100234
請求記号：336.17.T 登録番号：102551

「驕れる者久しからず」栄華を極めて勝手な振舞をする人は長くその身を保てないことを表す平家物語の冒頭の言葉で、謙虚に生きることの大切さを教えてください。しかし、優良企業が謙虚に誠実に経営しても倒産するといった一見矛盾する事例が山ほどあります。この「イノベーションのジレンマ」では偉大な企業がすべてを正しく行うが故に失敗する問題の原因を徹底的に分析します。

市場経済における企業は社会のニーズを捉えて、自らのシーズに不足する箇所を見出し、技術革新(イノベーション)によってニーズを満たして利益を得るとというのが、イノベーションについての一般理解です。本書はこのイノベーションを「持続的イノベーション」と呼びつつ、もう1つ重要な「破壊的イノベーション」があることを訴えています。この破壊的イノベーションとうまく折り合いをつけられなかった大企業が失敗するわけです。

ぜひ本書を読んで、2つのイノベーションの違いをよく理解し、将来を見据えられるエンジニアになってください。

(あらい いすまいる 電気情報工学科)

*BOOK * * BOOK * * BOOK *

購入希望図書案内

図書館に備えてほしい資料があれば、下記の申込書をカウンターに置いてありますのでお申し込みください。資料の種類は、図書、視聴覚資料などジャンルは問いません。可能な限りご要望にお応えしています。

購入希望図書申込書

* 二重野線枠のみ記入してください。				申込日:平成 年 月 日	
書名					
著者名		発行所		ISBN	
希望理由 1.授業・卒研で必要 2. 図書館においてほしいから					
その他					
申込者氏名		学年		学籍番号	
連絡先	電話番号				
	E-mail				

(平成22年度の購入希望図書申込は188件あり、173件の図書等を購入しました。)

平成23年度『読書感想文コンクール』入賞作品

『現実と理想の狭間』

最優秀賞 電気情報工学科4年 岩波 慶一郎

何かを選ぶときに自分が思い描いた通りに事態が推移することはほとんどない。それは生きている以上仕方ないことのように思えるし、少なくとも理不尽に思うことはない。だがそれは、思い通りにいかないことから来る不安と苦しみにさいなまれることからの解放とは等しくない。特に、私たちの年齢ならなおさらだろうと思う。無邪気に無限の可能性があるとは言えなくなってくる時期、進路や将来のことを考えると、思い描く理想と現実の乖離に愕然とし、ふと先のことが何も見えなくなると感じることもある。

プリズムの夏という小説は、そんな私と近い心情を持った少年たちが主人公だ。

思い描く未来が定まらない高校三年生で、語り手の少年植野。そんな植野と親友である今井。彼らは夏休みのある日、二人そろって映画館へ行き、そこで働く年上の女性、松下さんと出会う。美しいのに何処か生気を感じない松下さんに二人ともが惹かれる。仲の良い二人はそれをお互いに感じ取り合っていて、なぜか会話が続きすぎくしゃくとして、微妙な距離感を植野は感じ取る。植野の語り口もこのあたりは、いまいちはずきせず、相手の出方をうかがうような物になり、ある種の曖昧さを私は感じ取りながら、ひとり足をばたばたさせたい衝動に襲われた。気になる人への友達同士の牽制は、むず痒さを覚えると同時に強い親近感も感じたからだ。

美人で年上の松下さんは、理想を体現したような、あこがれの女性として植野は感じていた。彼女から映画の無料チケットを貰ったり、話しかけたのに無視されたりして、二人が一喜一憂する場面は、読んでいる私が恥ずかしく感じてしまった。この辺りまでなら、恋愛小説として通じるかもしれない。だが、二人がネット上で、松下さんと共通点を持つうつ患者の日記を見つけることで、話の流れががらりと変わる。だんだんとそのうつ患者が松下さんとしか思えなくなっていく二人は、理想であった彼女に裏切られたとして打ちひしがれ、それどころか父がうつ病である今井はネット上の日記を「まるで不幸の展覧会だ」と吐き捨て、父やネット上で日記を書く女性の弱さを批判する。

ここで今井が語る「本当のことは悲しみに属するのさ」という台詞は、父がうつ病で満身に働けないため、大学進学をあきらめざるを得ない今井の憤りを表しているが、そのことから来る複雑な感情が今井に弱さを批判させたのだと私は感じた。そのうち、いよいよ松下さんがうつ病の日記の女性だと確信を得た植野は、思い悩みなながらも、やはり松下さんに惹かれていることを自覚し、彼女を助けたいと考え始める。意を決して松下さんと会うときも、植野は暗く沈んだ海や死にそうなカナブンなど、重い風景にばかり気を取られ、会ってから何も手助けできない自分に後悔をしながら、植野は松下さんへの思いを自分なりに噛み砕いていく。

松下さんはうつ病で、自分は何もできない。それが悲しいながらも事実であり、植野は「本当のことは悲しみに属する」と松下さんが去った後に今井の言葉を思い出すのだ。

私は植野の行動を勇気だと感じた。理想からの乖離に打ちひしがれていた植野が、理想の松下さんではなくうつ病患者でもある松下さんと真摯に向き合っていく姿に、たとえようもないくらい、彼の全力を見た気がするのだ。私の中で、植野が親近感を覚える少年から、勇気を感じる一人の人物へと印象が変わった瞬間でもあった。

何とか松下さんを助けようともがき続けているうち、弱さを唾棄していた今井もまた松下さんを助けようとしていたことを植野はふとした時に知る。再会した友人は、うつ病の父の弱さを何とか許してやりたいと思う一方、松下さんを助けたいと感じるようになっていたのだ。二人はとうとう命を投げ出そうとした松下さんを間一髪のところまで助けることに成功する。その後、松下さんの心の療養に、二人が付き添っている場面が描かれてこの小説は終わる。決してハッピーエンドではないな、と思った。どう考えても描かれていないこれから先も大変だろうという想像がつくからだ。植野自身も、最後に「ぼくらは何を失ったのか気づいていない」と、夏の出来事が何かを得たものではないと回想している。そして、もう少し松下さんが回復した後みんなで海に行こうと植野は締めくくる。不器用で、様々な悩みを持ちながらも、懸命に前に進んでいこうとする強さが確かにそこにあった。そして出来るならば、私もそのように未来を作っていきたいと願う。

(「プリズムの夏／関口尚著」 集英社 2005年)



『本当の優しさとは』

優秀賞 建築学科2年 吉田 聖

本を閉じたとき、私はぎゅっと目をつぶった。辛かった。悲しくて、涙が溢れた。なにも、父親を亡くした哀れな主人公に同情したわけではない。戦争の惨禍に悲嘆の念を感じたからでも、孤独な少年の生き様に感銘を受けたからでもない。ただ、自分の中の“優しさ”が揺らいでゆくことが恐ろしく、苦しかったのだ。



物語に出てくる人は、皆優しかった。ただの優しさではなかった。戦争で大切な人を亡くした人、愛する故郷をあとにしてきた人、貧困の中を生きてきた人。死よりも苦しい過去を乗り越えて、今を生きていたのだ。彼らは、そんな苦しみにもう誰も遭うことがないようにと願っていた。それ故に、彼らからは優しさが溢れていたのだ。計り知ることのできないほど、大きな犠牲とひきかえの優しさが。

私は、過去にも同じ涙を流したことがあった。それは、中学三年生の時だった。私は、卒業式で読む答辞の原稿を考えていた。同級生全員が書いた答辞の下書きに目を通しながら、保護者、先生、後輩へ向けての感謝の辞を推敲していた。横に並んで、担当の先生が下書きの一つを読んでいた。近く家族を亡くした子のものだった。先生が、この子は以前よりも優しくなった、と言われた。大切な人を亡くすことは本当に辛いことだけれど、そんな子は、他の子からは見出すことのできない、先生が見ても驚くぐらいの優しさをもっているのだと。私は黙って聞いていた。

私は幼少からわがままな性格であった。しかし、年を数えるうちに私は変わりたいと思うようになった。優しい人になりたいと望んだ。私の中の自分はしばしば身を潜めるようになった。それが、周囲と円滑に接するための手段であったから。そのおかげで、私は特に何の厄介もなく日々を過ごすことができた。周りには私のことを優しいとまで言った。私は、自分が変わったのだと信じた。

だが、先生のこの言葉を聞いたとき、私は狼狽した。無論、私は家族を亡くしたことも、死ぬほど辛い目にあったこともなかった。何故辛い思いをした人だけなのかと、問いたくもなかった。でも、できなかった。自分の“優しさ”が本当のものなのか、自分でも自信がなく、分からなかったからだ。そう考えると激しい虚無感を感じた。悲しくなって、涙が流れた。代わりに私は言った。私にも天から授かった賜物があるはず、私はそれを人の役に立つように使っていくのだと。たとえ自分がそんな辛い思いをしたことがなくても、優しい人にはなれるはずだと、先生に言いたかったのだ。それは、自分に言い聞かせているようなものでもあった。しかし、その日私の中には、私はただ“優しさ”をまとっているだけなのかも知れない、という思いが残った。月日は過ぎても、この思いを完全に忘れてしまうことはできなかった。

本を読み終えたとき、私の中にはこの記憶が甦っていたのだ。この本からのメッセージと、記憶の中の先生の言葉が重なり合った。人の心とは皮肉なものだ。人に苦しい思いをしてほしくない、という本当の優しさは、大きな犠牲を払った苦しみの中からしか生まれえないというのだから。そうと知っても尚、私の心は優しい人になりたいと望むのだろうか。果たして私は、優しい人にはなりたいが、そんな苦しみには遭いたくない、と答えるのである。こんな私はやはり身勝手なのかも知れない。でも、と私は弁解をする。たとえ私の優しさが犠牲の伴わないものであったとしても、私は自分の心を人のために使ったことになるのではないか・・・。

私の頭の中で、この問いが収束することはない。私はこの先もずっと、答えを求めて苦悩してゆくだろう。いつか、私の涙が涸れ、本当の優しさを手に入れるときまで。

(『太陽の子』灰谷健次郎著 新潮社 1986年)

『何度も読みたくなる本について』

優良賞 都市システム工学科5年 平松 日祥

今回、私が題材として選んだ本は高専の読書感想文には似つかわしくないかもしれない。本書は児童文学に属し、その上ファンタジーなのだ。

そもそもファンタジーとはなんだろう。超自然的・幻想的・空想的な事物を主要な要素とした作品の総称であるとされる。最近ではライトノベルに漫画、ゲームが数多く発売され、現実と違う設定というものはどこにでもあるものになった。しかし、ファンタジーの金字塔とも言える指輪物語のような重厚な世界観を持つ作品というのはそう簡単に出会えるものではない。



精霊の守り人は新ヨゴ皇国という国を舞台に、女用心棒バルサと精霊の卵を宿した皇子チャグムが帝の差し向ける刺客や異界の魔物から逃げながら生活していくという話だ。バルサが短槍を用い胸躍る闘いを繰り広げることもあるが、私が何よりも面白いと感じたのは彼女らの生活であった。そこには文化が存在していた。衣食住が確立しており昔からの祭りがあり、国を創り上げているバックグラウンドがありありと見えるのだ。それは旅行記を読むような面白さなのかもしれない。現地の言葉、現地の料理、そこに住む人々が古くからの文化を抱き生きていることを知る。異国の地に思いを馳せ、そこでの生活を頭に描くこと。それができるほどの世界を、一つの物語の中にオリジナルとして創り上げるとするのは簡単なことではない。きっと読者は何も知らないチャグムと同じように、生々しくそして生き生きとした新ヨゴ皇国を物語の中で旅していくのだ。実を言うと、この話は守り人シリーズの一作目にあたりその後も話は続いていく。様々な国をバルサやチャグムが旅することになるのだが、国ごとにそれぞれしっかりと作りこんである。言葉が違い、風土が違うので生活様式が異なる。国ごとに貧富の差が存在し、その間に微妙な外交関係が成り立っている。読み進めていくごとに読者は新しい国を旅することができるのだ。その中でナユグと呼ばれる異界が、名を変えながらも各国の深いところに根付いているのもまた面白い。その面白さは現実の民俗学や文化人類学に通じるものがあるだろう。

また児童文学と言ったが、この本は全年齢向けに文庫版で出版され直している。児童文学という枠組みであろうが誰が読んでも面白いように書かれていることは間違いない。私が幸福であったのはこれを小学生の時に一度読み、そして成長した今再び手に取ることができたことだと思う。児童文学とは簡単な言葉で書かれているが、その内容が軽薄というわけではない。著者が伝えたい事を子供にも伝わるよう、それこそ魔法や冒険の要素を付加し読みやすくしているだけだ。人に感銘を与える本はそれぞれ違うが、きっと多くの人が昔好きだった物語があるだろう。それを読みなおしもう一度物語をなぞることで、きっと自分が成長しどう変わったのかを知ることができるだろう。これから先、きっと数年先に私はこの本をまた手にするだろう。この本だけではない。自分にとって大切な本はほかにもいくつかある。歳を重ねるごとに読み直したい、そう思える本に出会えたことをとても嬉しく感じている。

ファンタジーは虚構の話だ。ファンタジーに限らず、おおよそ小説と呼べるものは作り事だ。しかし、それは虚しいものではない。そこには必ず発見があるだろうから。本は他人の生き様を覗くようなもので、それはきっと自分を見直す機会になる。だからこそ本を読む人生を送ろうと思う。そして大切な本を見つけ、読みなおす度に昔の自分の至らなさや未熟さを思い出すのも楽しいだろう。その内の一冊としてこの本に出会い、またこのような場で物語についてじっくりと考える機会を得られたことを嬉しく思う。

(「精霊の守り人」／上橋菜穂子著 新潮社 2007年)

『悟浄出世』に学ぶ

優良賞 建築学科2年 岡山 紘明

この小説は、世界的に有名な小説「西遊記」で、三蔵法師や孫悟空、猪八戒とともに旅をした河童の悟浄の話です。何事にも「なぜ」という疑問を持つ気の病を抱えていた悟浄が、その病を克服するべく、様々な賢人に教を乞う旅をし、天竺へと旅に出るまでの出来事を描いています。

あるとき悟浄の病を聞き、一人の老いた魚怪が尋ねてきて悟浄にこう言います。

「殊に始末に困るのはこの病人が『自分』というものに疑を持つことじゃ…俺とはなんだ？こう考え始めるのが、この病の一番悪い徴候じゃ。」

この部分を読み、老いた魚怪の言っていることは自分にも当てはまるなと思いました。近頃まで将来のことについて考えると考えすぎて気が重くなっていました。「自分は将来どんな仕事に就きたいのだろう」「そもそも自分はなんのために生まれてきたのだろう」と考えては自分の将来に後ろ向きになっていました。しかし、いつしかそんなことを考えても何のためにもならない、時間の無駄だなと思うようになりました。

そのあと、悟浄はどんなに恥をかこうがあらゆる賢人たちに納得いくまで気の病が治るような言葉を教えてもらおう、と賢人訪ねの旅に出ます。この部分を読んでわたしは、悟浄は行動力があるなと思いました。私は、自分ができないことがあったら、その打開策を考えようとせず、「親の育て方が悪いんだ」とか、「あいつのせいで自分はこんなこともできないんだ」と、悲観してしまいます。しかし、悟浄は他人のせいにせず、自ら行動に移して気の病という災難を克服しようとします。この悟浄の恥じずに行動を起こす度胸が、私には足りないなと思いました。

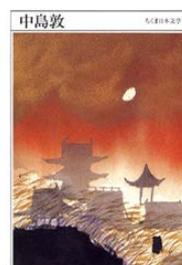
それから悟浄はあらゆる賢人に教を乞いますが、結局自分の求めるような答えをみつけられないまま、ついに悟浄は疲れて倒れてしまいます。そして長い昏睡から目覚めたとき、木叉恵岸と名乗る菩薩から、身にしみる、悟浄の核心を得るお告げをうけます。そして、木叉恵岸が去った後、悟浄が頭の中で「今の夢の中の菩薩の言葉だって、考えてみりゃ、女偶氏や糾髪鮎氏(悟浄が教を乞うた賢人)の言葉とちっとも違ってやしないんだが、今夜はひどく身にこたえるのはどうも変だぞ。」とつぶやきます。この部分を読んだとき、悟浄は賢人の方に教を乞うたときにはまだ、悟浄自身がその内容を理解できる段階にいなかったんだなと思いました。

わたしは、数学があまり得意ではありません。あるとき、定期テストでひどい点数をとりました。そしてそれが悔しかったので、それから一念発起して毎回授業前に予習をしてみることにしました。すると、これまでは授業で先生が教えてくださる事の半分も理解できなかったのに、大体のことが理解できるようになりました。予習をしてみるまでは「自分が理解できないのは先生の教え方が悪いんだ」と決め付けていましたが、予習をしてみて、「理解できる段階まで予習していなかった自分が悪かったんだな」と思うようになりました。そんなところが悟浄もわたしと同じだなと思いました。

この小説を読んでわたしは、自分が物事の先を考えすぎ、結局何もできない人間であること、自分を変えるために行動を起こす勇気がないこと、そして授業の予習の大切さ、の三つを改めて実感する事ができました。

経済不況の今、テレビ、新聞では就職氷河期と報じられ、簡単に手を差し伸べてくれる企業は決して多いとは言えません。近い将来そんな社会に出ていくわたしたちには、悟浄のように物事を考えすぎて何もしないのではなく、自分の道を自ら切り開くような勇気が必要だと思います。わたしはそんな素敵な教をこの本から学びました。

(「中島敦 (ちくま日本文学)」／中島敦著 筑摩書房 2008年)



『言葉を信用してはならない』

優良賞 建築学科2年 松下 日和

「人生において何よりもむずかしいことは、嘘をつかずに生きることだ。そして自分自身の嘘を信じないことだ。」

ドフトエススキーの「悪霊」に出てくる言葉だ。嘘をつかずに生きることの難しさは理解できるが自分自身の嘘を信じないことの難しさははじめ私には理解ができなかった。「告白」という小説は一つの殺人から始まった。

中学一年生の修哉はファスナーのつまみに手をかけると電流が流れるという発明品を作っていた。世間に注目されたかった修哉は担任の森口の娘である愛美に発明品を使って感電死させようとした。結果としては感電死せず、気絶しただけ、結局は同じクラスの直樹が愛美をプールに落とし、溺死させてしまった。

この殺人は事故として処理されたが、森口は真犯人を突き止め、クラスの生徒に向け事件の真相を告白した。この後、修哉は同じクラスの美月の首を絞め、学校に爆弾を仕掛けることになってしまう。この物語は6つの章で成り立っており、独白つまり登場人物視点の語りで話が進んでおり、登場人物が本当のことを語っている確証はどこにも無い。そう考えて物語を読んでいくうちにとある一つのことが疑問に浮かんだ。修哉は愛美に殺意があっただろうかと。

渡辺修哉という人間はどの教科のテストも満点、秀才という言葉がぴったり当てはまる中学生だった。私が修哉に殺意がないと思った所は発明品の電圧のことである。作中で発明品の電圧は人を殺すことはできない、できたとしても気絶する程度だと事件後、実際に発明品の電圧の数値を調べた森口が語っている。実は凶器として使われた発明品は失敗作だったのである。それにしても本気で人を殺すなら自分の発明品が確実に人を殺せる電圧かどうかぐらい調べなかったのだろうか。修哉が根本的なミスをしていることに私は違和感を覚えた。

修哉が愛美に殺意がなかったという発想でこの「告白」を何度も読み返してみた。修哉の独白では最初から愛美を殺そうとしている。実際はそうではないとすると、なぜ最初から殺意があると修哉は語ったのだろうか。

私はこの独白を語ったタイミングが美月の首を絞めたあとに語られたものだからだと思う。私の発想を前提において話を進めると愛美の殺人に関しては修哉には殺意がなく、手も下していないことになる。しかし美月の場合、修哉は彼女にあきらかな殺意を持ち、自分の手で人を殺している。この二つの殺人は修哉にとって決定的に違うのである。この後、修哉は爆弾を作り、学校に仕掛け、周りの人間を巻き添えに自殺しようとする。爆弾をくれるのなら最初からそうすればいいのに。学校を爆破！世間に注目されたいのならこのほうが良かったのではないかとも思った。

修哉は独白で自分は特別な人間で他人の人間を馬鹿だと何度も語っていた。修哉は「殺人が犯罪であることは理解できる。しかし、悪であることは理解できない。」とも語っている。最初はなんて鼻につくやつだろうと思っていた。しかしこれらは言い訳にすぎないのかもしれない。殺人イコール悪であることを修哉は十分理解している。しかし美月に対する殺人は普通の殺人事件と事件をなんらかわらない。ただ自分が世間にも馬鹿にされるような人殺しであることを認めるのがつらいだけなのではないのだろうか。私の疑問点からこの物語を読んでいくと、プライドが高い修哉は自分の弱さという一つのことを隠すためにたくさんの嘘をついていることになる。

この小説の文章は嘘をついている。自分の弱さを隠すためにたくさんの嘘を自分自身についている。単なる逃げだということは本人が一番わかっている。だけれど真実を認めるのがつらくて逃げてしまう。このいいような気持ちが理解できたとき、冒頭のドフトエススキーの言葉が私の胸をつらぬいた。

(「告白／湊かなえ著」 双葉社 2010年)



『不思議で、魅力的な、「河童」の世界』

優良賞 建築学科2年 山田 拓人

「出て行け！この悪党めが！貴様も莫迦な、嫉妬深い、猥褻な、凶々しい、自惚れきった、残酷な、虫のいい動物なんだろう。出ていけ！この悪党めが！」
こんな過激なセリフからこの「河童」という物語は始まっていきます。とある精神病院の患者、第二十三号が語る、自らの「河童の世界」での生活の思い出。しかし最後には全てが彼の妄想だったのであろう、というオチの物語です。



僕が最初にこれを読んだ時に思ったのは、しかし、本当に彼の話は全て妄想の物語なのであろうかということでした。物語終盤において、彼が「向こうの机に黒ユリの花束があるでしょう」と何も無いつくえを指したり、河童の友人が書いてくれた詩集だと言って電話帳を読み上げたりしている点から、彼の話は妄想だったのだ、と思わせているわけですが、それにしても話はとてもリアルです。果たして妄想だけでこれほどまでに具体的な話がつくれるのでしょうか。

そんな彼の物語に登場する「河童の世界」。この世界は彼曰く、「深い穴に落ちて」行った世界だそうですが、この世界、外の世界である人間の世界とかけ離れている点、そしてとてもよく似た点があるのです。例えば、暮らしている民族や言語などは当然大きく異なるのですが、機械化が進んでいる点や、変わった芸術家が多い点、さらにはかつて戦争を繰り返していた点などは人間の世界ととてもよく似ています。なので僕は思うのです。彼が見ていたのは「河童の世界」では無く、普通の「人間の世界」だったのでは無いかと。

彼は話の終盤で「しかし、河童の国から帰って来た後、丁度一年ほどたった時、僕はある事業の失敗したために……」と言いかけます。この言葉は結局、担当医によって遮られ、最後までは書かれていないのですが、おそらくこの事業の失敗によって彼は発狂したのだろう、と僕は思いました。つまりそれまでに彼が見てきた河童の世界というのはそれまでに彼が見てきた人間の世界のことでないかと。河童の世界で彼は色々な河童と、そしていろいろな事件と巡り会います。医者や学生、漁夫、盗人、音楽家と検閲、詩人とその自殺、資本家など。それは彼が実際に現実で会った人々、体験したことなのでしょう。しかしその多くは普通の生活ではそうそう巡り会えるものではありません。ですから彼は発狂した時に思ったのでしょう。「これは現実では無い。別の世界で起きた話なのだ」と。

そう思って読み返してみると、一つ、気になる部分が出てきます。彼は人間の世界へ戻ってきてしばらくたったある日、「河童の世界へ帰りたい」と思うようになります。河童の世界が、彼にとっては苦しいはずの人間の世界だとすれば、何故その世界へ帰りたいのか。

それは自分が今、何故生きているかということと同じだと思います。自分が過ごしている日常。その中でも当然辛いことや嫌なことはあります。逃げ出したくなるようなこともあります。でもそんな中でも辛さを乗り越えられるだけの魅力があります。きっとこの主人公は発狂するほど現実を嫌い、逃げ出そうとしていたけれども、それでも人間の世界が好きだったのではないかと思います。つまり彼は狂ってしまい、本人も冒頭のセリフのように人間が嫌いだと思い込んでいるものの、人間世界を本当は誰よりも好きだったんだろう、だからこそその世界で身に降りかかった災いを信じたくなかったのだろうと思いました。

河童の世界、もとい人間の世界には色々なものがあります。宗教があり、戦争があり、おかしい文化を守り続ける者がいる。けれどもその世界は去っていったものに「帰りたい」と思わせるほど魅力的な世界です。文中で河童の学生ラップが言った一言にこういうものがあります。

「いえ、あまり憂鬱ですから、逆さまに世の中を眺めてみたのです。けれどもやはり同じことですね。」
自分たちが生きるこの「世界」。辛いことや、悲しいことがあってもそれから逃げてはいけない。だってこの世界にはそれ以上の何かがあるはずだから。 そんな思いの聞こえてきそうな作品でした。

(「河童・戯作三昧／芥川龍之介著」 (C) 角川書店 2008年)



学生用推薦図書・雑誌

推薦図書コーナーに開架しています。(以下、抜粋)

誌名	請求記号	登録番号
<u>機械工学科推薦</u>		
液晶のおはなし	428.3.T	102378
伝熱工学資料	501.26.N	102389
先端事例から学ぶ機械工学	530.0.N	102390
わかりやすいロボットシステム入門	548.3.M	102392
金属のおはなし	560.0.O	102368
「日経ものづくり」	雑誌	
<u>電気情報工学科推薦</u>		
現代過渡現象論	541.17.O	102419
入門デジタル信号処理	547.1.K	102420
ビギナーズデジタルフィルタ	547.11.N	102418
パワーエレクトロニクス入門	549.8.O	102417
「OHM」	雑誌	
「トランジスタ技術」	雑誌	
<u>都市システム工学科推薦</u>		
津波災害	369.31.K	102412
ながれの事典	423.8.K	102446
ホームページで学ぶ構造力学	501.34.I	102414
サステナブル社会基盤構造物	510.0.O	102415
道路管理者のための実践的橋梁維持管理講座	515.8.K	102408
風景学入門	629.1.N	102410
<u>建築学科推薦</u>		
コミュニティデザイン	318.8.Y	102441
2011年東北地方太平洋沖地震災害調査速報 / 日本建築学会	453.212.N	102422
「まちづくり」のアイデアボックス	518.8.H	102428
ダブルネガティヴスアーキテクチャー	520.4.D	102429
建築プレゼンの掟	525.1.T	102434
最高の建築写真の撮り方・仕上げ方	746.0.H	102424
<u>一般科目推薦</u>		
日本中枢の崩壊	312.1.K	102396
DNA型鑑定の歩み	317.75.S	102400
基礎数学	410.8.O	102403
学生のための化学実験安全ガイド	432.1.S	102402
乱用薬物の化学	499.15.I	102401
「CNN English Express」	雑誌	
「大学への数学」	雑誌	

詳しくは、図書館HP (<http://www.akashi.ac.jp/lib/siryousuisen11.htm>) をご覧ください。

利用ランキング 2010.10.1 - 2011.9.30

－図書－

- ① 17回 「向こう三軒両隣り」
- ② 16回 「新 TOEIC TEST 頻出 1200 語 スコア 730 レベル」
- ③ 15回 「ぼくの居場所」
- ③ 15回 「集まって住む」
- ③ 15回 「家を保つ」
- ④ 14回 「家族をつくった家」
- ④ 14回 「エース建設構造材料 改訂新版」
- ④ 14回 「建設材料学 第6版」
- ④ 14回 「土木材料学 新版」
- ④ 14回 「みちの家」
- ④ 14回 「構造力学徹底演習 ステップアップで実力がつく」
- ④ 14回 「ドラゴン・リリーさんの家の調査」

－DVD－

- ① 14回 『ハリーポッターと謎のプリンス』
- ② 10回 『アリス イン ワンダーランド』
- ② 10回 『2012』
- ② 10回 『トイ ストーリー3』
- ③ 9回 『重力ピエロ』
- ④ 8回 『人志松本のすべらない話 其之四』
- ④ 8回 『トリック 霊能力者バトルロイヤル』
- ④ 8回 『ハリーポッターと死の秘宝』
- ⑤ 7回 『ナイトミュージアム2』

－雑誌－

- ①「新建築」 ②「新建築. 住宅特集」
- ③「住宅建築」 ④「A+U 建築と都市」
- ⑥「サッカーダイジェスト」
- ⑥「ディテール」⑦「建築知識」

図書館利用状況 (平成18年度から平成22年度)

項目 / 年度		18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	
年 間	入館者数	時間内	39,850	39,449	35,768	36,114	38,734
		時間外	11,116	8,681	8,955	8,318	7,132
		計	50,966	48,130	44,723	44,432	45,866
	AV ルーム	計	3,272	3,720	2,839	2,042	2,358
	貸出者数	計	3,670	3,557	3,382	4,185	4,103
	貸出冊数	計	7,188	6,876	6,683	7,754	7,666
	開館日数	年 間	294	295	291	283	292
一日平均	入館者数(時間内)	163	160	147	152	162	
	入館者数(時間外)	46	36	38	36	30	
	A V ルーム	11	13	10	7	8	
	貸 出 者 数	12	12	12	15	14	
	貸 出 冊 数	24	23	23	27	26	

【開館時間】 時間内：平日 8:30～17:00 時間外：平日 17:00～20:00 土曜日 10:00～16:30

